

現代日本人の宗教意識 - JGSS-2000 からのデータを中心として -

木村 雅文

(大阪商業大学総合経営学部)

The Contemporary Japanese Religious Consciousness
From some Data of JGSS-2000 and Other Social Surveys
Masafumi KIMURA

The aim of this monograph is some considerations on the contemporary Japanese religious consciousness by the use of some data from JGSS-2000 and other social surveys. We confirm four characteristic features about this theme. The ratio of Japanese religious belief in JGSS-2000 is low, compared with other projects' result. We guess this reason that we add to the second choice on "There is a family religion, however, I do not personally follow". In present-day Japan, the majority of religious believer is a Buddhist to be reflected traditional character as "family religion" since Tokugawa(Edo) period. The religion with subjects' spouses in our project do not make little difference from his or her mate's one. It seems to us that this phenomena is also functioned by "family religion".

Key words: JGSS-2000, religious consciousness, "family religion"

本稿の目的は、JGSS-2000 から得られたデータを中心にし、その他の社会調査の結果も参照しながら現代日本人の宗教意識を考察するところにある。ここでは、以下のような特徴のあることが確認された。JGSS-2000 によると現代日本人のなかで信仰する宗教があるという人の割合が、他の社会調査と比べて低くなっている。このような回答が現れたのは、JGSS-2000 で個人の信仰の有無を尋ねるばかりでなくて「信仰していないが、家の宗教はある」という選択肢を加えていたからではないかと考えられる。現代日本においても“家の宗教”という江戸時代以来の伝統的な性格が反映しているために宗教名としては仏教が多く挙げられている。調査対象者のうちで配偶者のある者に対しては、配偶者の宗教を尋ねたが、本人の場合と大差のないものが得られた。これも“家の宗教”がはたらいっているからだと思われる。

キーワード：JGSS-2000、宗教意識、“家の宗教”

1. はじめに

本稿は、現代日本人の宗教意識の特徴を考察することを目的としている。しかし、このテーマについては、宗教学などいろいろな学問分野において非常に多くの研究がなされており、これらをすべて参照することはとてもできないように思われる。

そこで、本稿では、この論文集が調査結果として用いている JGSS-2000 によって得られたデータを中心にすることに限定したい。もっとも、JGSS は、今後継続されるとはいえ、まだ 2000 年度に実施された本調査が一回行われただけであるため、経年的なトレンドを分析することはできない。また、JGSS の成り立ちからいって当然に国際的な比較を視野に入れているとはいえ、そこまでは蓄積が及んでいない。このため、本稿においては、最近に行われたその他の社会調査で明らかになった宗教意識に関する結果も参照しながら、JGSS-2000 においてどのような点が明らかになったのか、を紹介してみることにしたい。

2. 現代日本人と宗教とのかかわり

2.1 現代日本人と宗教的な心情

毎年刊行されている『宗教年鑑』には、現代日本における最新の宗教統計が掲載されている。その平成 12 年版によれば、1999 年 12 月末日現在では、226597 の宗教団体（宗教法人を含む）が存在しており、これらが申告した信者数を合計すると 2 億 1403 万人（神道系 1 億 624 万人、仏教系 9579 万人、キリスト教系 176 万人、いわゆる新興宗教を含む諸教系 1024 万人）に及んでいる（文化庁編、2001、31 頁）。したがって、現在の日本の総人口は、1 億 2692 万人なのであるから 1)、公表された統計のうえでは日本人とは神道と仏教を主なものとして一人が二つ近くの宗教を兼ね併せて信仰していることになるというわけである。

しかも、文部省（現在は文部科学省）の統計数理研究所が 1953 年から 5 年ごとに行っている「国民性調査」のなかで 83 年から 98 年までの 4 回において調査項目になった「『宗教的な心』というものを大切だと思いますか」という問いに対して「大切」とした回答が 80% から 68% ほどあり（統計数理研究所、1999、74 頁）2)、近代的な合理主義にもとづく科学技術が発達した昨今にあっても“宗教的な心”が高く評価されている事実注目しなければならないであろう。このように、宗教的な雰囲気に対する精神的な共感が、われわれの生活のなかになかなか見られるのは、各人がライフコースにおいて経験する通過儀礼の多くが、あるいは毎年繰り返される年中行事のあるものが、それぞれ歴史的・民俗的に何らかの宗教や信仰とのかかわりをもって行われていることから理解できるように思われる。

2.2 現代日本人における宗教の有無

それでは、現代日本人で何らかの宗教を信仰していると表明している者の割合は、どれくらいなのであろうか。JGSS-2000 では、宗教関連項目として「あなたは、信仰している宗教がありますか」と問い、対象者に信仰する宗教の有無を尋ねている。その結果を見る

と「ある」は9.5%（男性9.3%・女性9.6%）に過ぎず、ここだけをとらえて見ても『宗教年鑑』に現れた数字が実際にはほとんど当てにならないものであり、現代日本人は漠然とした“宗教的な心”は大切と信じていても、特定の宗教に対するコミットメントをあまり持っていないことが分かるであろう。

その上、この数字については、「世界価値観調査」(1995年)において日本人で「何らかの宗教を持っている」と答えがあった37.8%（電通総研・余暇開発センター、1999、147頁）や「国民性調査」(1958年から98年まで9回の調査)で「宗教をもっている、信じている」として出た25%から35%の間の数字（統計数理研究所、前掲書、73頁）あるいはNHK放送文化研究所がISSP国際調査として日本で行った宗教意識調査（1998年）のなかで「信仰する宗教あり」という35%（小野寺典子、1999、53頁）といった他の世論調査に現れた結果と比較すれば、90年代末の日本における宗教事情に大きな変化が起こっていないはずにもかかわらず、かなり低い回答だといわなければならない。

2.3 現代日本人と“家の宗教”

このような結果になったのは、何故なのであろうか。その理由としては、JGSS-2000で信仰の有無を尋ねた前掲の設問において「特に信仰していないが、家の宗教はある」という選択肢を用意したからではないか、と考えられる。なぜなら、この「家の宗教はある」とする回答が25.0%（男性27.7%・女性22.7%）あり、先に見た「信仰している宗教がある」と合わせると34.5%（男性37.0%・女性32.3%）となって他の結果と近くなるからである。恐らく、他の調査における回答においては、信仰していると明確に認識していないにもかかわらず、日常生活のなかで接触することの多い“家の宗教”が記憶にあったから、宗教を持っていると思って答えたのであろうと推察される。すなわち、このJGSS-2000では、日本人の宗教へのとらえ方における一つの興味深い特徴を知ることになったわけである。

さて、この“家の宗教”とは、何であると見たら良いのであろうか。まず、“家”という概念から始めてみよう。ここでいう家とは、現に生活を共にしている家族とか家庭とかだけを単に指すのではなく、「血統集団であって、構成員の死亡・出生・結婚等による変動はあってもその同一性を保持して存続してゆくものだ」という信念を伴うところのもの（川島武宜、2000、155頁）とされており、その構造には封建社会の武家家族に起源を持ち、明治時代に制定された旧民法が想定していた“家族制度”のイメージが当てはまるといえそうである。そして、かかる家を日本社会の基礎的な生活集団としてとらえる三戸公氏は、「生活機能の単位体であり、生活機能の内容は信仰、経済、法律、道徳、自治、芸術、娯楽等である」（三戸公、1994、27頁）と論じ、家が日本人の生活にとって多面的な機能を有していて、なかでも信仰という宗教的な機能を持っていることを明らかにしている。こうして、これらの論述からは、川崎恵璋氏が“家の宗教”を「世代を超えた家と特定の宗教とが譜代的な関係において結合しているもの」と定義したことに結び付いてゆくのではな

いか、と考えることが可能である。

ところが、川崎氏の記述の後半には、「典型的には伝統的仏教における寺壇関係にみることができる」(川崎恵璋、1968、424 頁)と述べられており、この部分からは“家の宗教”なるものの特徴が祖先を祭祀するというような心情的な行為を指すばかりではなく、1640年にキリシタンなどを取り締まるために各家の宗旨を登録する「宗門人別帳」の作成を命じた江戸幕府の宗教政策による統制のもとで制度化されていった過程の方が重要であるように考えられる。この結果、寺院は、葬送や法事などを通じて檀家である信者の管理を担当したところから「江戸時代には、信仰の自由はなくなりました。生まれた途端に、宗旨が決まるのです」ということになったとされている(橋爪大三郎、2001、190 頁)。以上のような由来から、日本人では、自らが主体的にある宗教を信仰の対象として選んだというよりも、“家の宗教”として先祖から伝えられてきた何らかの宗教(あるいは宗派)が自分の家族生活のなかにすでにあっただので、「宗教がある、宗教を持っている」と思っていることが多いのではないかと、としてもよさそうである。

このように、日本人の宗教意識に伝統的な性格が残っているのだとしたら、性別・年層別によって違いが認められるであろうことは当然に想定できるであろう。

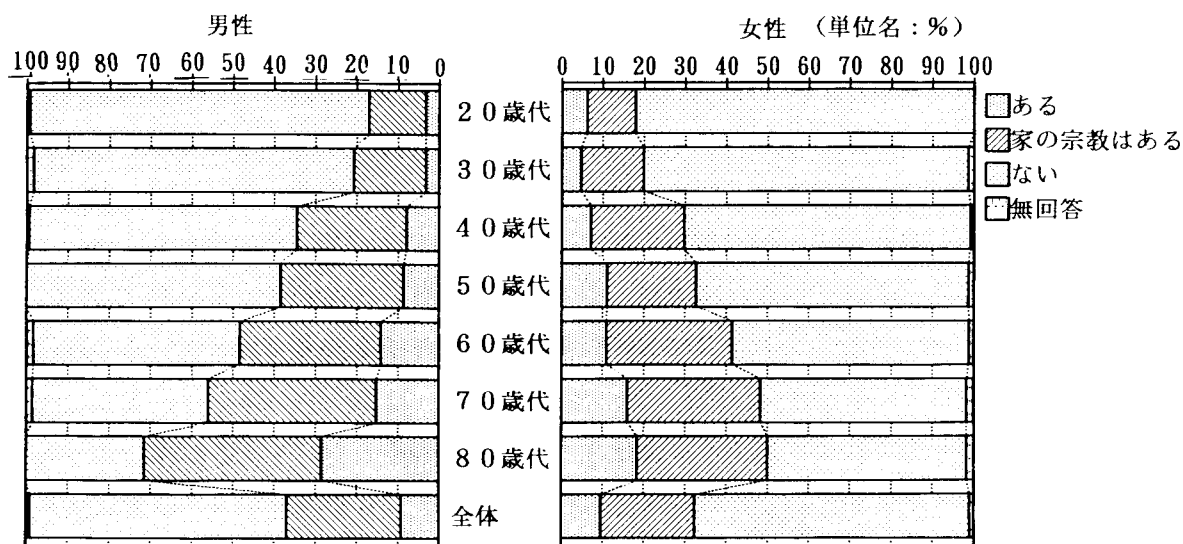


図1 JGSS-2000による現代日本人の宗教の有無 (性別・年層別)

この結果は、図1の通りで、年齢に応じて鮮やかに一定の傾向を見せていて、とりわけ男性の60歳代からは「宗教がある」が半数を超える勢いを示している。これは、ISSP調査においても60歳代を境に「信仰する宗教あり」が「ない」を上回っていることとして確かめられている事実であり(小野寺、前掲論文、53頁)、歳を取れば健康への不安にともなって死を意識することが多くなるために心のより所を求めて宗教に関心を持つようになる、といえそうである。しかし、女性の場合では、80歳代にならないと逆転しないという点が相違していることに注意をしたい。この違いは、「家の宗教はある」という回答が、男女全

体で5ポイント、とりわけ50歳代以上からは10ポイント前後も異なっているところから表れており、これは男性にとって男性がかつて家長や戸主として守ってきた伝統の一つである“家の宗教”を意識する場面が多いからではないか、と考えられる。つまり、“家の宗教”の機能が、以上のような形になってはたらいっていると見ることができるのである。

2.4 現代日本の多神教的な性格

それでは、現代日本において「信仰している」か「家の宗教はある」として挙げられている宗教名には、どのようなものが存在するのであろうか。JGSS-2000では、上の二つの回答をした者に対して具体的な宗教名が何かを答えてもらっている(表1)。

表1 JGSS-2000において挙げられた宗教名

仏教	253(25.4%)	創価学会	58(5.8%)
真言宗	65(6.5%)	立正佼成会	5(0.5%)
天台宗	9(0.9%)	霊友会	2(0.2%)
浄土宗	57(5.7%)	幸福の科学	1(0.1%)
浄土真宗(本願寺・門徒宗・南無阿彌陀仏)	224(22.5%)	宗教真光・真光	4(0.4%)
禅宗(曹洞宗・臨済宗)	92(9.2%)	天理教	11(1.1%)
日蓮宗	56(5.6%)	真如苑	3(0.3%)
時宗	2(0.2%)	霊波之光	1(0.1%)
神道	27(2.7%)	百光	1(0.1%)
キリスト教	11(1.1%)	生長の家	6(0.6%)
カトリック	5(0.5%)	金光教	3(0.3%)
プロテスタント	2(0.2%)	大山祇命神示教会	2(0.2%)
日本ハリストス正教会	1(0.1%)	御嶽教	1(0.1%)
エホバの証人	1(0.1%)		

これを見ると、仏教という回答が具体的な宗派名を挙げたものを合わせると76.2%と圧倒的に多いという特徴が現れている。そして、神道が2.7%あり、キリスト教は2.0%にとどまり、さらに諸教に数えられているものが合計で9.7%となっている(これら以外に仏教と神道を並べたり、“先祖供養”や“森羅万象に神が宿る”といった日本らしいものを含んだその他の表現、わからない、無回答が合わせて94例で9.4%。合計数997)。このように、21世紀に入った現在の日本であっても、「江戸幕府は日本人全員に、許可された宗派の仏教徒であることを義務づけました」(橋爪、前掲書、191頁)とあることに起源を有する仏教(および仏教の諸宗派)が自分の宗教あるいは“家の宗教”として受け止められていることが目立っているといえるであろう。そして、いろいろな系統を持ったたくさんの宗教が宗教上の激しい争いをあまり演じることなく併存しており、われわれは多神教のような文化的な環境のなかで生活をおくっているように思われる。

2.5 信仰の度合と「宗教団体」への見方

2.5.1 信仰の度合

こうして見てきたように、現代日本人の宗教生活においては、“家の宗教”といわれる性格があるとすれば、信仰の熱心さについてはどうであろうか。JGSS-2000 では、「信仰する宗教がある」・「家の宗教はある」という両方の対象者に対して「あなたは、自分が熱心な信者だと思いますか」と信仰の度合を尋ねている。この結果は、「熱心である」7.1 % (男性 6.1 %・女性 8.1 %)、「まあまあ熱心である」27.7% (男性 22.9%・女性 32.0%)、「そんなに熱心でない」63.2% (男性 67.1%・女性 58.7%) となっており、“家の宗教”に拘束されることが少ない女性の方が信仰の度合いについてはやや熱心であるという数字が出ている。しかし、全体的な傾向を要約すれば、現代日本人の過半数を大きく超える 65.5% は宗教を持っていないとしているうえに、「宗教がある」という残りの 34.5% のなかにあっても、このうちの多くが“家の宗教”があるというだけなのであるから、当然に自分を熱心な信者だと自覚するに至っている人は少数にとどまっている 3)。

2.5.2 「宗教団体」への信頼度

いかなる宗教や宗派にとっても、その教義の展開と教団（信者がつくる団体や会）の活動は、大きな意義をもっていると思われる。とくに、創価学会をはじめとする諸教系の宗教については、挙げられている宗教名そのものが団体の一員であることを意味していることになり、彼らの信仰する宗教として表明されている。

さて、JGSS-2000 では、いろいろな組織を挙げ、これらに加入しているかどうかを調べているが、このうちで「宗教の団体や会」へ入っている人の割合は 6.5 % という少なさである。たしかに、前で見たと通り「信仰する宗教がある」という人が全体の 9.5 % に過ぎないのであるから、それぞれの宗教の信者団体の一員となっている人がさらに少数なのは当然なことといえよう。ただし、諸教系の宗教名を挙げた人では宗教団体への加入が 79.2%、「信仰がある」人では 53.2% もいるのに対し、「家の宗教はある」では 5.6 %、「ない」では 0.5 % に過ぎないことから判断すれば、諸教系を中心に自分の信仰の有無と宗教団体への加入とが明らかに関連をもっていると見ることができるのである。

さらに、JGSS-2000 には、われわれが社会的に重要な組織や地位についてどのようにとらえているかを知るために、これらを信頼しているかどうかを尋ねている項目がある。そのなかでは、宗教団体も取り上げられているので、これを見ることにしよう(図2)。すると、宗教団体への信頼度は、「とても信頼している」2.5 %、「少しは信頼している」10.3%、「ほとんど信頼していない」69.3%、「分からない」17.5%であり、「とても信頼」は国会議員の 1.6 % に次ぐ数字であるばかりか、「信頼していない」の割合が他に比べてかなり大きく、現代日本人の宗教団体への信頼が本調査の 15 例中でも 15 位と非常に低いことが示されている。しかも、これは、他の調査ともほぼ共通した結果となっている 4)。ここでも信仰する宗教のある人では、「とても信頼」・「少しは信頼」が 20.8%・33.2% と信頼度

がかなり高いのであるから、多くの信仰持たない人達は宗教団体の存在や活動に対して違和感を覚えている、これらを信頼していないことが分かるのである。

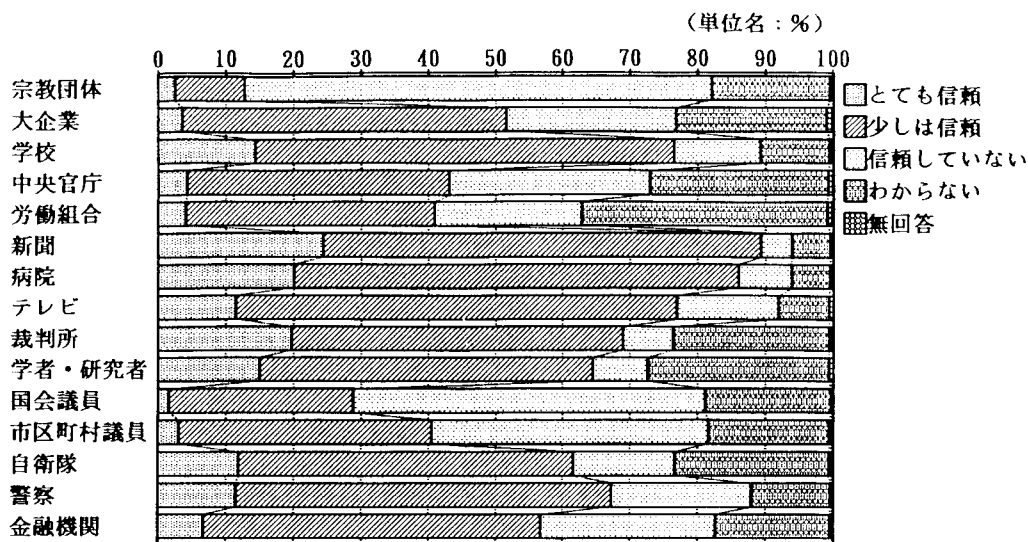


図2 組織への信頼度

3. 「配偶者の宗教」をどう見ているか

3.1 配偶者における信仰の有無と信仰の度合

このように、現代日本人の宗教意識においては、明治時代以降の精神構造の近代化、世代の交替、地域移動にともなう世帯の分離など解体要因がどんどん進んでいるにもかかわらず“家の宗教”が影響を及ぼしている事実が明らかになった。そこで、JGSS-2000 では、調査時点で配偶者があるという対象者に対して同様の質問形式を用いて家族生活におけるパートナーである配偶者の宗教を尋ね、これを確認することを試みた。

その結果、信仰の有無については、「信仰している宗教がある」9.8% (女性の回答つまり夫について7.9%・男性の回答つまり妻について11.9%)、「特に信仰していないが家の宗教はある」23.7% (夫について23.6%・妻について23.8%)、「ない」65.8% (夫について68.1%・妻について63.3%)、無回答0.7% (夫について0.5%・妻について0.9%) となっており (該当数-夫について1102・妻について998、合計2100)、妻に対しては「信仰している宗教がある」をやや高く、夫に対しては「家の宗教がある」を低く見ているところがあるが、自分に関することとの間には大きな相違は出ていない。

また、同様に「宗教がある」という配偶者の信仰の度合については、「熱心である」9.9% (夫について9.1%・妻について11.3%)、「まあまあ熱心である」29.4% (夫について24.5%・妻について35.8%)、「そんなに熱心でない」58.0% (夫について66.4%・妻について52.9%) になり (該当数-夫について339・妻について225、合計704)、自分のこと

とあまり違いはないものの、相手側の方に信仰心が少しあると見ていることが分かるし、信仰の有無の状況とも関連して夫は妻の方に信仰の度合をいくらか高いように感じていることが確認できる。

3.2 「配偶者の宗教」として挙げられた宗教名

さらに、「信仰する宗教がある」と「家の宗教はある」とした配偶者の持っているとする宗教名に関しては、以下の通りの回答が得られた（表2）。

表2 JGSS-2000において「配偶者の宗教」として挙げられた宗教名

仏教	206(29.3%)	創価学会	45(6.4%)
真言宗	37(5.3%)	立正佼成会	3(0.4%)
天台宗	6(0.9%)	霊友会	3(0.4%)
浄土宗	38(5.4%)	幸福の科学	1(0.1%)
浄土真宗(本願寺・門徒宗・南無阿弥陀仏)	144(20.5%)	宗教真光・真光	3(0.4%)
禅宗(曹洞宗・臨済宗)	59(8.4%)	天理教	9(1.3%)
日蓮宗	40(5.7%)	真如苑	4(0.6%)
神道	12(1.7%)	P L教団	1(0.1%)
キリスト教	12(1.7%)	百光	1(0.1%)
カトリック	3(0.4%)	生長の家	4(0.6%)
プロテスタント	3(0.4%)	金光教	2(0.3%)
エホバの証人	1(0.1%)	大山祇命神示教会	3(0.4%)
		御嶽教	2(0.3%)

以上をまとめると、仏教が合わせて75.3%、神道1.7%、キリスト教2.6%、諸教を合計して11.3%が挙げられている(その他の表現2.3%、わからない1.3%、無回答5.3%で計8.9%、合計数704)。これも本人のいう宗教名の分布とで比較すると、二三の出入りや割合に若干の違いがあるものの大差はないと判断できるであろう。

これに加え、対象者が挙げている宗教名と配偶者について挙げられている宗教名をクロスさせ、同じ宗教名を挙げているかを調べると、以下の通りの結果となった(表3)。

表3 対象者が挙げている宗教名から見て「配偶者の宗教」として挙げられている宗教名が同じである割合

仏教	96.6%	創価学会	97.3%
真言宗	81.5%	立正佼成会	100%
天台宗	60.0%	霊友会	100%
浄土宗	86.4%	幸福の科学	100%
浄土真宗(本願寺・門徒宗・南無阿弥陀仏)	90.9%	宗教真光・真光	100%
禅宗(曹洞宗・臨済宗)	87.2%	天理教	100%

日蓮宗	94.6%	真如苑	100 %
時宗	0 %	靈波之光	0 %
神道	90.9%	百光	100 %
キリスト教	80 %	生長の家	66.6%
カトリック	66.7%	金光教	100 %
プロテスタント	50 %	大山祇命神示教会	66.6%
日本ハリストス正教会	0 %	御嶽教	100 %
エホバの証人	100 %		

ケースが少ない宗教名があるので割合には偏差が現れているが、仏教を合計してみると、一致度は91.1%になっているし、諸教系では100%も目立っている。すなわち、本人が認知しているうえでの配偶者との間の宗教関係は、大体において一致しているのである。これには、配偶者のどちらかが結婚後に合わせたようになったのか、あるいは同じ宗教を信じていて宗教団体における活動をしたことがきっかけになって結婚したのか、などが理由として考えられるであろう。ところが、仏教を宗教としている者の宗教団体への加入率は7.5%と低いのであるから、仏教を宗教として挙げている夫婦では「ひとつの家がひとつの寺と固定した関係を結ぶ一家一檀那寺へと次第に変わっていった（山折哲雄・川村邦光、2000、105頁）とされる江戸時代の制度に由来を持つ“家の宗教”がやはり機能していると思われる（しかし、諸教系では、加入率が79.2%となっているから、こちらでは後者の要因も十分に起こりうるはずだといえよう）。

4. むすび - 国際的な比較から

さて、前に紹介した「世界価値観調査」では、調査対象23カ国の国民に対して「何らかの宗教を持っている」かどうかを尋ねている。それによれば、18位までが70%を超えているのに対して、日本人の回答率の37.8%は22位という低さになっている（21位が50%のドイツ、23位が0%と特異な結果を示した中国）。すなわち、日本人は、初詣でや墓参などの宗教的な行為はするにしても特定の宗教への信仰を表明することが少ないが、他国ではアメリカをはじめ近代化の進んだ先進諸国であっても決してそうではないのである。しかも、日本は、男女別で見ると男性の方が高いという4カ国のなかに属していて、これも特徴的だ、とされている（電通総研・余暇開発センター、前掲書、146頁）。

これらの点についてまとめれば、まず日本人の宗教意識が世界の宗教人口の多くを占めるキリスト教やイスラム教といった一神教を信ずる国々と異なり、仏教を中心とするものの実際には多神教のような文化環境にあるばかりか、その仏教も江戸時代以来宗教としては形骸化してしまい、一般的には強い信仰を自覚する機会に乏しかったことが挙げられる。また、JGSS-2000では、「世界価値観調査」と異なって女性の方（妻についての見方も）が信仰の有無や信仰の度合においてやや上回るという数字が出ており、男性の方が「宗教を

持っている」として高く見えたのは家長としての男性が維持してきた“家の宗教”が残ってきたからではないか、ということができよう。

このように、日本の外では、われわれとは大きく異なった宗教意識の方がはるかに普遍的なのであるが、そのなかで現代日本人の宗教意識を解明するうえで JGSS-2000 が“家の宗教”という選択肢を取り上げた意義は大きいとしなければならないであろう。

[注]

- (1)2000年10月国勢調査の速報結果による(総務庁統計局編、2001、8頁)。
- (2)1958年から78年までは同じ質問項目であるが、「宗教をもっていない、信じていない、関心がない」と回答した者のみに尋ねている(統計数理研究所、前掲書、74・75頁)。
- (3)全体からでは、「宗教があって熱心な信仰」2.4%、「宗教があってまあまあ熱心な信仰」9.6%、「宗教があってそんなに熱心な信仰でない」21.8%、「宗教があって信仰の度合が無回答」0.7%、「信仰している宗教はない」63.2%、「信仰の有無が無回答」0.9%という結果となる。
- (4)宗教団体への態度を見ると、ISSP国際比較調査では、「非常に信頼」1%、「かなり信頼」3%、「まあ信頼」20%(小野寺典子、前掲論文、58頁)。世界価値観調査では、「非常に信頼する」は2.1%、「やや信頼する」10.4%となるが、「信頼する」は22カ国中の最下位である(電通総研・余暇開発センター、前掲書、95頁)。

[参考文献]

- 小野寺典子,1999,「日本人の宗教意識 - ISSP 国際比較調査,日本の結果から」,『放送研究と調査』1999年5月号,NHK放送文化研究所。
- 川島武宜,1955,「イデオロギーとしての『家族制度』」川島,2000,『日本社会の家族的構成』岩波書店(岩波現代文庫版)。
- 川崎恵璋,1968,「都市における家の宗教の変容」川崎,1994,『村落・都市・宗教 - 実証的研究』,法律文化社。
- 総務庁統計局編,2001,『日本の統計』2001年版,財務省印刷局。
- 電通総研・余暇開発センター編,1999,『世界23カ国価値観データブック』,同友館。
- 統計数理研究所,1999,「国民性の研究 第10次全国調査 - 1998年全国調査」,『統計数理研究所研究リポート』83号。
- 橋爪大三郎,2001,『世界がわかる宗教社会学入門』,筑摩書房。
- 文化庁編,2001,『宗教年鑑』平成12年版,ぎょうせい。
- 三戸公,1994,『「家」としての日本社会』,有斐閣。
- 山折哲雄監修・川村邦光執筆,2000,『すぐわかる日本の宗教』,東京美術。